

## 共同研究を終えて

研究代表者 田和 正孝

3年間にわたる神奈川大学国際常民文化研究機構プロジェクト型共同研究「漁場利用の比較研究」を無事に終えることができた。

本研究の主要な目的は、漁場利用の技術や知識について、その実態と歴史的推移を明らかにするとともに、地域間あるいは異なる生態環境での漁場利用について考察し、さらには漁場利用の社会的・経済的、歴史民俗的意義について問うことであった。

代表者は、これまで、漁場利用の研究を漁業地理学的な視点から大きく二つに分類して考えてきた。ひとつは、制度（しきたり）や用益権に注目した漁場利用研究、もうひとつは漁業活動の生態学的側面に注目した漁場利用研究である。前者の中心は、漁場争論や漁業権益の変化を史・資料を用いて考察するものである。後者の中心は、漁業活動を計量的手法や参与観察法によって得られた資料から漁業者と漁場との関わり方、すなわち人間－環境関係（man and environment relationship）を理解する研究である。代表者は、これまで、複数の地域において後者にあたる漁場利用の生態学的研究を進めてきた。それらは、漁場空間で行動する漁業者に焦点をあてた共時的な研究ということもできた。しかし、同じ調査地に時を違えて訪ねる機会を繰り返し獲得するにおよんで、変化する漁場利用形態にも注目するようになった。フィールド調査に基づく新たな時間軸を設定して、通時的に漁場利用を考える重要性を理解することができたのである。これは、上述した漁業地理学における漁場利用研究の2分野を融合する立場であった。さらに、これまで多くの専門分野でなされてきた漁場利用に関する諸研究が、さまざまな時間設定の中において分析されてきたことも改めて認識することができた。

本共同研究を開始するに際して、国際常民文化研究機構の安室知氏より研究申請に際してメンバーに加わるようお誘いをいただいた。ありがたくお引き受けし、すぐさま安室氏とともに組織づくりを考えた。この時に考慮したのは、漁場利用の時間的・空間的研究を十分に認識しており、内容の濃い議論を展開できる研究者の集合体をつくることであった。その結果、民俗学の安室氏、漁業文化地理学の田和、水産社会学から若林良和氏、歴史地理学を専門とする河原典史氏、橋村修氏、さらに研究協力者として日本中世史の越智信也氏が加わった。

安室氏は複合生業論の提唱者として、また水田漁撈研究に関して学界では名の通った民俗学者であり、漁場利用についても日本列島沿岸、とくに三浦半島や長門の磯根地帯において、民俗知識と民俗技術を解明すべく調査を続けている。農民漁民的な漁場利用や農間漁業などにも造詣が深く、漁場を認知する簡易三角測量技術やマアテによる景観の道具化（海中・海底という不可視空間の可視化）についても研究を進めてきた。若林氏は、カツオ漁業者の漁船上での労働と生活に関する研究者として知られる。カツオにまつわる民俗や食文化のほか、生態や資源論なども含めて、文理融合を念頭に置いた総合の学としての「カツオ学」の提唱者でもあり、これまで多くの研究書を上梓してきた。近年はカツオ漁業の応用的な研究として、太平洋・東シナ海地域においてカツオの集魚装置（パヤオ）漁業とその漁場利用について研究を続けている。河原氏は、沿岸漁村の家屋配置、漁業補助空間の研究をはじめ、移動漁民の研究、第二次世界大戦前における日本人の漁業移民と彼／彼女らの漁業開拓などに精通している。近年の主たるテーマであるカナダにおける日本人漁業の活動については、新たな史・資料を見出し、それらを用いる研究手法にまで議論を高めてきた。橋村氏は、九州各地の海と人との関わりに関する歴史を中世から近世にいたる文書資料に基づいて探っ

てきた。近世期における漁場利用慣行の全国的な動向についても研究を進め、さらには現代のシイラ漁に関心を抱き、日本各地はもとより東アジア、中央アメリカ、地中海をフィールドに調査研究をおこなってきた。田和は、西南太平洋諸地域における沿岸漁業の漁場利用について現地調査を続け、近年では伝統漁具である石干見の文化誌的研究を進めてきた。

本報告書は、以上のような各班員・研究協力者の調査研究を背景として、各自が本共同研究に基づいて得ることができた成果を問うたものである。研究のさらなる深化を示せたものと自負している。しかしながら、研究者数が限られていたため、期待しうる成果として当初より提示してきた「現代社会における漁場利用を研究するための学際的かつ国際的な視野」を十分に高めるには至らなかった。これについては、今後の課題であるが、他のプロジェクト型共同研究に、漁場利用研究に精通した多くの人類学者、漁業経済学者が参画しており、こうした研究者の成果が我々の残された課題を十分に補ってくれるであろう。

「漁場利用の比較研究」班は、3年間にわたって、各自の計画による国内外のフィールド調査はもとより、沖縄県宮古島市および兵庫県明石市などにおける共同調査、機構が主催した国際シンポジウムへの参加、研究成果の報告会、他班との合同研究会など多彩な調査研究を実施することができた。このような豊かな研究の機会をいただけたのは、国際常民文化研究機構運営委員長の佐野賢治先生をはじめ、運営委員の先生方のご指導および機構事務局の皆様のお蔭である。この場をお借りして心よりお礼を申し上げたい。